

戦後
過去から
未来へ

伝えたい

教師が義勇軍を勧めた子は、長男以外の子、経済的に困難な家庭の子が中心でした。子ども達は、なぜ、どんな思いで義勇軍に志願したのでしょうか。

「尋常高等小学校の最後の年になると毎日のように、『満州へ行け。一男・三男は満蒙へ渡ってお国のため天皇陛下のために働くのが一番だ』としてく勧められ、心の底から神国日本のため天皇陛下のために、義勇軍に入らなければ『伊澤巖』と信じて義勇軍を志願した子。拓植訓練で教育を受け、我らは若き義勇軍。一日も早く渡満し、国策の第一歩を踏み出し、満州の土となる(中塚勝)という固い決意と夢を抱いて渡満した子。

なぜ、子どもたちは 義勇軍に志願したのか

4



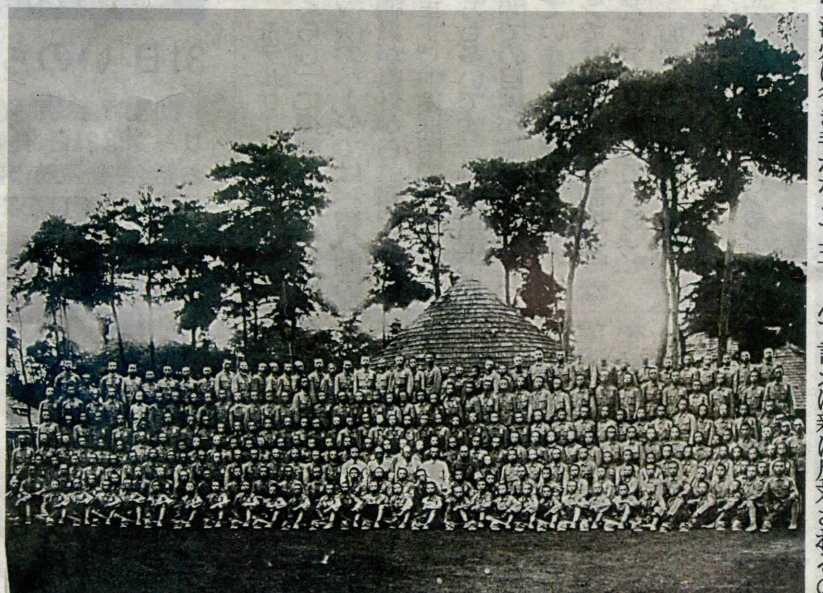
満州に送り出された子どもたち

「担任から毎日義勇軍に行けと言われていた子が、担任ではない教師に、父は身体が不自由、母も病気がちななど義勇軍には行けない事情を必死で訴え義勇軍行きを断つてくると、信頼する教師に頼みに来た。ところがその教師は、『満州は日本の生命線である。君等のような若者がこの重責を負わなくてはならない』などと得意になって説得した。その子は義勇軍行き承諾を担任に伝えた。担任は『目標達成だ。校長先生もご機嫌だ』と喜んだ。その子は戦争が終わっても帰っては来なかった(三澤豊。経済的困難家)



のに行かされた子。

つた。満州に行き手がなくて五
んて言えば親に反対されるの



子どもたちを満州に導いた
義勇軍勧誘パンフレット

内原訓練所で撮影された小池中隊記
念写真(諏訪上下伊那3郡で編成)

教師の勧め 81.4%、家族反対 52.5%

で、親に黙って満州へ行くって言った(橋爪五郎)。親の反対で義勇軍行きを直前で断念した子に代わり、教師の説得を受けて義勇軍になった子。

「今まで父母の許可はとっていないが、拓植訓練から帰後は、何としても父母の許可を受けて憧れの満州に行くだ(米山雄)。義勇軍への強固な意志を示し、反対する親を説得して行った子。

「十四や十五の子とも達が『俺は満州に行くんだ』と言って親の言うことも聞かなかった。先生がほとんど勧め、親はほとんど反対だった。それを押し切って印鑑を盗み出して志願したのは一体なぜだったか、真剣に考える必要がある」(宮下慶正・中隊長体験者)

昭和16年の義勇軍対象心身動機調査によると、義勇軍送出数が全国の中で突出して多い長野県では、教師の勧めが81.4%、家族からの反対を受けた者52.5%、いずれも全国平均よりも非常に高かったのだ。